



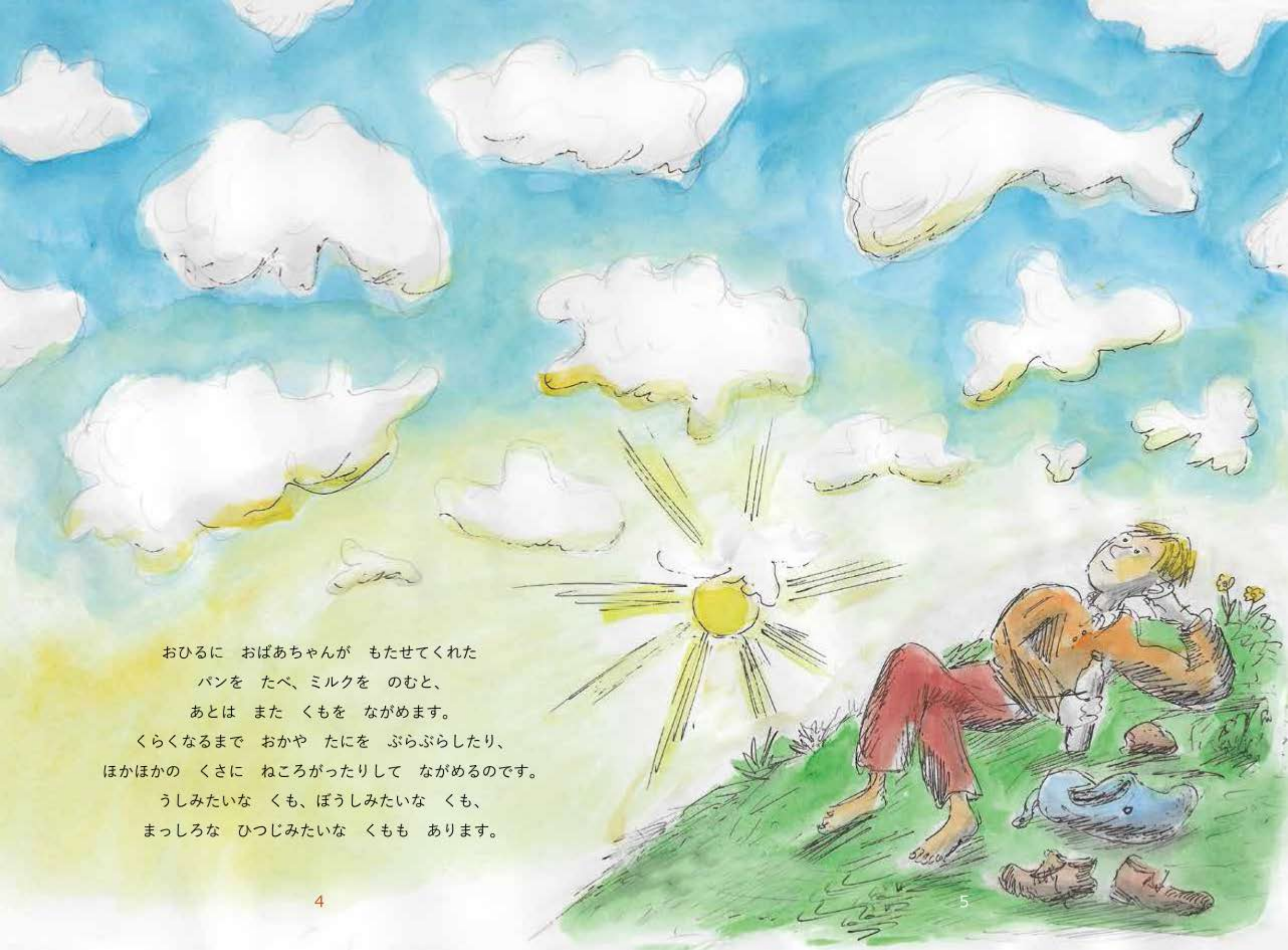
やまでくもをながめるのがだいすきな
おとこのこがいました。

やまのてっぺんのいしにこしかけ、
ながれるくもをながめながらかんがえます。

こんなふうにあふわふわのんびり

そらをとべたらなあ。

いろんなところにいけたらなあ。

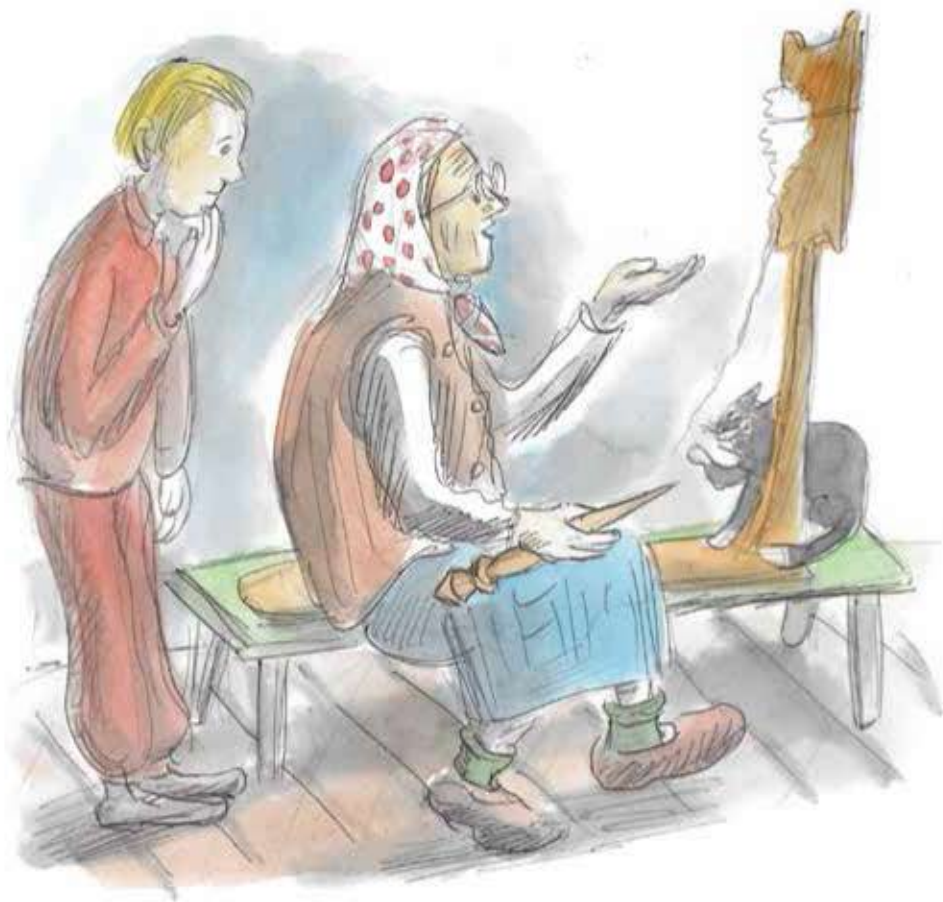


おひるに おばあちゃんが もたせてくれた
パンを たべ、ミルクを のむと、
あとは また くもを ながめます。
くらくらするまで おかや たにを ぶらぶらしたり、
ほかほかの くさに ねころがったりして ながめるのです。
うしみたいな くも、ぼうしみたいな くも、
まっしろな ひつじみたいな くもも あります。



「この くもは もうふに にてるぞ。
くるまったら あったかいだろうな。
ああ、なんだか さむくなってきた！ ぶるる！
もう ひが しずんだし、いえに かえらなくちゃ！」





おとこのこは はして いえに かえり、
おばあちゃんに マフラーを あんでくれるよう たのみました。
よるおそくまで やまに いても ござえないようにです。

すると おばあちゃんは、
つむぎいたの しろい ちいさな かたまりを みせて、
いいました。

「もう これだけしか いとが ないんだよ。
これじゃあ、てぶくろ かたっぽにも たりないねえ。
けいとさえ あれば、おまえが やまで ござえないように、
セーターだって あんで やれるのに。」

つぎの ひの あさ、おとこのこは
おばあちゃんが いとつむぎに つかう ぼうを もって、
たかい やまに のぼりました。



てっぺんに つくと、
ちかくに うかんでいた くもを ひとつ、
ぎゅっと つかまえました。
もこもこの ひつじみみたいな くもです。
そして その しっぽを ぼうに まきつけ、
くるくる まわして、
くもから しろい いとを つむぎはじめたのです。

